

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

「文科省の競争的資金に思うこと」

研究科長 藤川 清史

国立大学の独立行政法人化以来、文科省は、使途限定がなく大学の一般財源となる運営費交付金を削減してきています。その一方で、特定のテーマや課題のもとに公募を行う目的指向的な競争的資金を拡大しています。このような背景から、大学の各部局も競争的資金への応募が奨励されており、国際開発研究科は、「大学院教育改革支援プログラム」(2007年度)、「大学の世界展開力強化事業」(2012年度)の採択に続いて、本年は2件の「リーディング大学院」事業への応募案件に参加しています。

本研究科は、日本の大学院教育の拠点を強化しようという1990年代の文科省の「大学院重点化」戦略の一環として開設されました。1991年から現在まで、旧帝国大学7大学と東京医科歯科、東京工業、一橋、神戸、筑波、新潟、金沢、岡山、広島16の国立大学が重点化されています。

1999年の教育白書に、大学院重点化の意義について書かれた一節があります。「今日、我が国に対して学術研究の推進を通じて国際的に貢献することや、これを支える優れた研究者を養成することが強く求められるようになってきている。また、急速な技術革新や社会・経済の高度化・複雑化等に伴い、高度な専門的知識・能力を持つ人材の養成、社会人の再教育等の需要も大きくなってきている。これらのニーズにこたえる上で、大学院の重要性が増大しており、その整備充実は大きな政策課題となっている。このような観点から、文部省では、平成3年に大学院制度面で弾力化を図るなど必要な改正を行うとともに、予算面においても大学院の充実と教育研究の一層の高度化を図っている。」

この白書にあるように、大学院重点化が目指された当時の文科省は、博士号を取得した専門人材への需要がやがて拡大すると予測していました。しかし現実には、日本社会での博士への需要は、供給ほど拡大しませんでした。旧来の大学院教育

では、学生は狭い専門に特化したオタク的博士になりがちで、広い視野を持ったリーダーたりうる人材を輩出することが難しかったようです。

さて、冒頭で述べた、「大学の世界展開力強化事業」と「リーディング大学院」は、実社会でありあまり人気がなかったオタク博士対策でもあります。国際感覚と幅広い知識のある博士を育成するのは、学生に「そうなりなさい」というだけでは不十分で、新しいプログラムを提供せねばなりません。上記2件の事業は、実社会が期待する人材を輩出するための教育プログラムのアイデアを大学から募り、それが文科省の審査を通過すると、大学にはその教育プログラムを実施する資金が提供されるというものです。

私が本研究科に赴任して何よりも誇らしく感じることは、本研究科には勉強熱心な学生が集まっていることです。魅力ある教育プログラムを提供すれば、きっとさらに勉強熱心になってくれるでしょう。しかし、一度始まった教育プログラムを維持するには、文科省の当初の補助金だけでは足りず、競争的資金を取り続けなければなりません。競争的資金に採択されると、教育内容を充実させられるというプラス面がある一方、プログラム運営にかかわる雑務も増加します。教員は、学生の教育や研究、社会貢献にも多くの役割を期待されている中、競争的資金を取り続けることは負担になりかねず、バランスをどこで取るかが課題ではあります。

日本の若者は元気がない、内向きだと言われるのですが、国際開発研究科では、海外で仕事をしようという意欲をもった学生が、多くの留学生とともに学んでいます。本研究科の教職員は、そうした学生を日本社会が期待する「広い視野を持った」高度専門人に育てるべく、議論と努力を重ねています。名古屋大学本部からもご支援をいただきつつ、本研究科の与えられた役割を果たしてまいりたいと考えています。

TOPICS

「大学の世界展開力強化事業」 ーキャンパスアセアンプログラムー

特任教授 西村 眞

平成24年度文科省より採択された掲題プログラムは、本学においては国際開発研究科がリーダーとなり、法学研究科・法学部、法政国際教育協力研究センター、経済学研究科・経済学部、農学国際教育協力研究センターの5部局が共同で主催する「ASEAN地域発展のための次世代国際協力量リーダー養成プログラム」である。提携校は、シンガポール国立大学を筆頭に、タイのチュラロンコン大学、フィリピン大学ロスバニョス校、ベトナムのホーチミン市法科大学及びハノイ法科大学、カンボジアの王立法経大学、インドネシアのガジャ・マダ大学といずれもASEAN各国を代表する優良大学である。日本からこれらの提携校に本プログラムの実施期間5年間で、220名、また提携校から本学に192名、合計412名の留学生を交換するという大規模であるだけでなく、質的にも非常に革新的なプログラムである。

革新的というのは次の3つの特徴に代表される。

- 1) 双方向性、即ち、従来の海外から留学生を受け入れるだけでなく、日本からの海外留学を促進し、日本語、日本の文化、法制支援、経営手法など積極的に発信する。
- 2) 品質保証、即ち、国際的なシステムに対応する単位互換と成績管理の体制を整備し、透明性、客観性の高い成績管理を行い、更に結果に対しても外部評価を導入し達成目標に対し厳格な管理を行う。
- 3) 創造性、即ち、冷戦構造の終焉と同時に起こったIT革命、金融革命、グローバル化により生じた新しい国際環境の中で、特にASEAN地域と日本の間の協力関係をクリエイトできる新しいリーダーを育成する。

以上の概念でプログラムを実施するため、平成25年3月11～12日、本学において提携校の代表11名、外部委員を含む諮問委員3名、本学関係者22名、学生約50名の参加を得て、第一回キャンパスアセアン国際シンポジウム、及び運営委員会、品質保証委員会を開催した。各提携校の代表は従来型の国際協力プログラムに見られるDonor校vs Recipient校という構図ではなく、本プロジェクトの謂わば、Equal Partnershipによる協働という構図を非常に好感し、各校において既に進捗している同様の人材育成に向けた態勢やその理念を積極的に披瀝し、本プロジェクトの成果を上げるための様々な建設的な意見や、目標となる人材に関してもそれぞれの地域、分野を踏まえた特徴ある意見具申があった。また、品質保証に関しても、大学間協定の早期締結や単位互換制度の導入に関して非常に協力的な意向表明が相次いだ。更に本校に対しては、多数の代表が「アジア最大の産業基盤の上に立脚した大学」との基本認識を持ち、その上でトヨタ自動車に代表されるグローバル企業の本拠地における留学生のインターンシップ、更にはその延長線上に就職を視野に入れた長期的な人材育成に関する「熱のこもった」発

言が多くあった。

一方で、シンポジウムに先んじて一部実施されたSEND (Student Exchange Nippon Discovery)プログラムの短期留学に参加し、ベトナム、カンボジア、インドネシアより帰国したばかりの本校学生が国際シンポジウムにおいても積極的に発言を行い、提携校代表から「既に本プログラムの成果が出始めている」との賛辞が出るなど注目を集めた。

かくしてInaugurationとしての国際シンポジウム他は成功裡に幕を閉じたが、その結果を踏まえ、現在国際開発研究科においては本年度のプログラム実施に向けた環境整備を急ピッチで推進中である。その概要は次の通り。

- 1) 品質保証を実現する単位互換制度の策定(対象:チュラロンコン大学、フィリピン大学ロスバニョス校への長期留学生派遣)
- 2) 本研究科受け入れ留学生のためのインターンシップ受け入れ先の交渉(例:トヨタ自動車、デンソー、ブラザー工業、三井物産、森精機、豊田通商ほか)
- 3) 各提携校のTop(総長、研究科長(Dean)、学部長)との意見交換による本プログラムへの大学全体の協力の取り付き尚、平成25年度実施予定の学生交流のスケジュールは次の通りである。
 - (1)4月 Campus ASEAN Program説明会の開催
 - (2)5月～7月 2013年度チュラロンコン大学とフィリピン大学ロスバニョス校への長期派遣の募集・審査・人選決定
 - (3)8月 派遣学生への説明会の開催
 - (4)9月 カンボジア王立法経大学へ短期留学生 (OFW: Overseas Field Work)約20名派遣
 - (5)10月～来年3月 チュラロンコン大学へ長期留学生1名派遣
 - (6)10月～来年3月 チュラロンコン大学より長期留学生1名受け入れ
 - (7)10月～来年3月 フィリピン大学ロスバニョス校へ長期留学生1名派遣
 - (8)10月～来年3月 フィリピン大学ロスバニョス校より長期留学生1名受け入れ
 - (9)10月 チュラロンコン大学より短期留学生約5名受け入れ



2012年度 学位授与状況

2012年度に当研究科(GSID)より授与された学位数は以下のとおりです。

課程博士取得者19名。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)8名、国際協力専攻(DICOS)5名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)6名です。

修士学位取得者は76名。取得者を専攻別に見ると、DIDが26名、DICOSが32名、DICOMが18名です。



▲博士学位取得者記念撮影(DID)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOM)

入学状況

2013年度 4月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	22 26 49	12 15 25	11 14 23
国際協力	17 17 31	12 15 25	10 15 23
国際コミュニケーション	28 28 36	18 16 22	16 15 20
合計	67 71 116	42 46 72	37 44 66

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	4 7 11	3 3 9	3 3 9 2
国際協力	5 8 10	4 7 9	3 5 8 6
国際コミュニケーション	6 3 8	6 3 8	6 3 8 4
合計	15 18 29	13 13 26	12 11 25 12

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

2012年度 10月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 6 6	1 6 6	1 6 6
国際協力			
国際コミュニケーション			
合計	1 6 6	1 6 6	1 6 6

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	4 3 6	3 1 3	3 1 3 0
国際協力	2 2 4	0 2 2	0 2 2 0
国際コミュニケーション	4 2 4	1 1 1	1 1 1 0
合計	10 7 14	4 4 6	4 4 6 0

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

学位取得者のことば

DID Dr. Mandar Kulkarni

The first thing that came to my mind when I contemplated on my own experience as a Ph.D. graduate of GSID was the unique academic environment and exposure to various topics and issues provided at GSID. The unique academic environment of GSID refers to the multicultural and interdisciplinary nature of the institute, which inspires the thinking of students beyond their area of interest. Moreover, the expertise available through the renowned faculty is the biggest strength of GSID. To be able to successfully complete the Ph.D. program requires tenacity and self-belief as the most important qualities. At times, we get stuck with a problem in our studies and do not find a way out. On other occasions, we cannot catch up with our own schedules due to many reasons. In such situations, self-belief and positive mindset lead us to the right direction. Additionally, inspirational discussions and academic guidance from supervisors and other professors used to be the biggest push for me to find solutions. Helping hands from other graduate friends and seniors always made me feel at home. This experience reminds me the quote of Paulo Coelho saying, "When you really want something to happen, the whole world conspires to help you achieve it". My whole stay in Nagoya, Japan was very fulfilling and rewarding. It gives me immense satisfaction that I could complete my studies within the given time frame. I would also like to emphasize that graduating with a Ph.D. is not an end in itself, but the first step towards a bigger goal in life. The most important thing that I would like to take home is the legacy of education imparted by GSID. For me, this legacy can be best expressed through this quote of Mahatma Gandhi, "You must be the change you wish to see in the world".



DICOS Dr. Eilen May V. Abellera

Gaining a doctoral degree, the highest degree attainable in all academic disciplines can be personally and professionally satisfying, yet it is a rigorous and life-changing process. It takes a lot of determination, stamina and an incredible amount of self-determination, as the challenges tend to increase along the way. Before I applied for the Ph.D. program, the most important thing that I asked myself was, would a Ph.D. degree help me obtain my dream career in the future? Answering this question is vital as it served as my motivation to endure the long, tedious and independent research project. What I learned is that Ph.D. will challenge you in many ways and while you are totally responsible for your own research, getting maximum support from your institution and professors will do a great deal in helping you achieve your target. I am confident to say that the Ph.D. program in the Graduate School of International Development is highly instrumental in aiding my Ph.D. goals. Among the biggest strengths of GSID is the richness in multiculturalism: professors and students from different parts of the world engaging in year-round intellectual discourses. GSID has provided me with optimum academic exposure and training to become a highly capable independent researcher. In addition, my academic advisors showed deep interest in my research and were very helpful, and at the same time gave me just the right amount of pressure to ensure that I produce quality research, finish my dissertation chapters and publish manuscripts on time. I consider the Ph.D. degree as an instrument in widening my horizons. After the intense training and intellectual enrichment, I am now ready to face bigger challenges and become a more productive member of the society.



海外実地研修 2012

海外実地研修(Overseas FieldWork: OFW)は、途上国における開発のあり様を実践的に学ぶ体験を重視してきた国際開発研究科が過去20年間継続してきたプログラムです。例年5月から7月にかけての事前講義で訪問国に関する基礎知識を学習すると同時に、グループごとに調査計画を立てるなどの準備を済ませてから、フィールドに入ります。2012年度は8月下旬から9月上旬にかけての2週間、カンボジアのKampong Thom州を訪れました。カンボジアでの実施は2005-7年度以来5年ぶり4回目です。

Kampong Thom州は首都プノンペンから車で4時間あまり、私たちが訪れたのは雨季にあたり、陸路が不便になることもあります。私たちが調査地とした村へのアクセスはなんとか確保できていたものの、奥の方へ行くにしたがって悪路に車がハンドルを取られるような箇所もしばしばありました。毎日ガタガタ道に揺られて調査に通うというのも、学生にとっては一つの経験になったことと思います。

例年調査地の特性に合わせたテーマを設定しワーキンググループに分かれて調査を行ないますが、2012年は「経済」「教育」「移民」「保健」の4つでした。「経済」はコミュニティ・フォレストリーが村人の

海外実地研修実施委員会 委員長 東村 岳史

生活向上に貢献する度合い、「教育」は就学・進学率を向上させるための要因、「移民」は村から国内外に出稼ぎする人々の生活変容、「保健」は村人の治療手段の選択状況、といった課題をそれぞれ明らかにしようと試みました。滞在最終日には王立プノンペン大学で報告会を行ない、質問やコメントをいただいて最終報告書を仕上げるヒントになりました。

過去3回同様王立プノンペン大学にはカウンターパートとして諸々の手配や助言・通訳等多大なご尽力をいただきました。2週間寝食をともにすると、同行してくださるカウンターパートの先生・学生さんたちと非常に親密になります。週末の休日にはアンコールワットへも一緒に足をのばし、学生・教員が入り混じって写真撮影に興じる姿が印象的でした。また調査チームを受け入れてくださった村の関係者の方々にも大変お世話になりました。記して感謝したいと思います。



国内実地研修 2012

国内実地研修は、現場での実践的な教育研究活動を重視する国際開発研究科にとって重要な取り組みの一つであり、海外実地研修とともに研究科共通科目として位置づけられている。学生にとっては、日本国内における諸課題に対応する地方行政の取り組みや日本の開発経験を学ぶ機会である。

2012年度は、愛知県瀬戸市の協力を得て10月24日～26日に現地調査、11月26日に結果報告会を行った。参加者は博士前期課程1年生16名(日本人学生4、留学生12名)で、3つのワーキンググループ(WG)に分かれて現地調査を行い、教員4名が引率にあたった。

瀬戸市は、昭和4年に愛知県下5番目の市として誕生し、平成21年には市制80年を迎えた。人口13万人を超える都市で、工業団地や住宅地の開発が進んでおり、人口も増加傾向にある。日本屈指のやきものの産地として知られるが、近年では、製造業としての窯業から観光資源としての位置付けを高めつつある。地域の特性・優位性を活かした地域づくりに努力し、時代の変化に対応している。たとえば、窯業で培われた「ものづくり」の精神を多様な産業へとつないでおり、独自の地域発展のモデルを提起している。一方で、日本全体に共通

国内実地研修実施委員会 委員長 西川 由紀子

する課題への対応も迫られている。特に、農業従事者の高齢化及び減少、さらに耕作放棄地の増加などの問題が顕著であることから、非農業従事者に農業への関心を持ってもらうための取り組みを行っている。また、瀬戸市の教育における取り組みでは、学校教育で取り入れられているキャリア教育において、地場産業に携る市民を講師に迎え入れるなどユニークな試みも見られる。このような状況を踏まえて、WG1は農業、WG2は教育、WG3は産業をテーマに取り上げて調査を行った。

瀬戸商工会議所、瀬戸市役所、愛知県陶磁器工業協同組合、本山中学校、瀬戸養護学校、訪問企業と農家の皆様、そのほか公的・民間機関の方々には、ご多忙の中、多大なご協力とご高配を賜った。参加した学生にとっては日本の自治体の抱える諸課題とそれに対する具体的な施策などについて理解を深める貴重な機会となった。心から感謝の意を表したい。



GSID教員の新刊紹介

『言語研究のための正規表現によるコーパス検索』

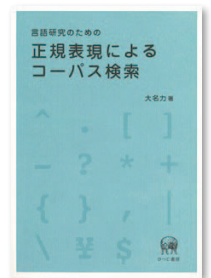
ひつじ書房(2012年9月刊行) 大名 力(著)

正規表現とは文字列のパターンを記述する記法で、パターンにマッチする文字列の集合を指定することができる。— などと言われると文系の自分には縁のない話だと思う人が多いだろう。しかし、正規表現をうまく利用すれば、「worthの後に最大3語挟んで-ingで終わる語(ただし、thing, something, anything, everything, nothingは除く)が続く」のような条件を指定し、効率よくコーパスから該当例を抽出することもでき、言語研究にも大いに役立つ。本書はこのような言語研究に役立つ正規表現の使い方を注意点とともに解説したものである。

筆者の専門は英語学だが、前任校の群馬大学で1993年に新設の社会情報学部にも所属が変わったのをきっかけに、本格的に電子テキ

ストを英語研究に利用するようになった。ユーザーフレンドリーな利用環境などない当時、重宝したのが正規表現で、言語研究に利用するために独自に工夫を重ねていった。

国際開発研究科に移って2年後の2002年に名古屋大学で行われた英語コーパス学会創立10周年記念大会で2日にわたりワークショップの講師を務めたが、その時の内容を拡大・改訂し大学院の講義や公開講座などで教えてきたものが本書の基となっている。出版が2012年と随分と遅くなってしまったが、内容は古くなっていないので、これから多くの方に利用していただければ幸いである。



『比較教育学の地平を拓く：多様な学問観と知の共働』

東信堂(2013年3月刊行)

山田 肖子・森下 稔(共編著)

本書は、比較教育学に関わる日本の中堅研究者17名、海外の研究者5名による18章、重鎮4名(1名は故人)によるコラムで構成されている。この企画は、科学研究費補助金事業「発展途上国教育研究の再構築：地域研究と開発研究の複合的アプローチ」(平成21-24年度、基盤A)の一環として、学会員に行ったアンケート調査及び紀要掲載論文等からの研究傾向分析に端を発している。比較教育学は元来、多様な学問観、手法、視座による研究を積極的に内包する学問分野である。アンケートや論文マッピングは、漠然と認識されていた研究の裾野の広がりや、目に見える形で示した。科研プロジェクトに端を

発しつつも、本書は、アンケートから抽出された特性の異なる研究アプローチを端的に語ってくれる研究者を広く求め、対話、練り直しに多くの時間をかけた。各章では、それぞれ、「比較」することの意味、社会学や経済学などのディシプリンとの接点、定性的・定量的手法、研究対象(教育内容、政策、社会と教育の関係、開発と教育、ジェンダーなど)、研究対象地域(東アジア、東南アジア、アフリカ、中東)などについて取り上げ、各執筆者の学問観を率直に開示し、学問分野の今後の展望を考察している。



『小型武器に挑む国際協力』

創成社(2013年3月刊行) 西川 由紀子(著)



世界では1時間に約1人の割合で小型武器の犠牲者が生じている。小型武器は今日の武力紛争では必ずといって良いほど使用されている。また、一見平和な国でも小型武器の犠牲者は後を絶たない。本書は、こうした小型武器に注目し、その問題にとりくむ国際協力について焦点を当てた。小型武器の問題にとりくむ「国際的」な動きに内包する矛盾と限界、さまざまなアクターによる多様な「協力」を通して国際協力の一側面を炙りだそうとする試みである。

本書では、まず小型武器はどのようなものであり、今日世界でどのくらい広まっているのかについて概観している。そのうえで、小型武

器が世界で最も集まる地域のひとつとして知られるアフリカの角を例に、現地調査で得られた情報をもとに、小型武器がどのように人々の暮らしに関わり、生活や文化に影響をもたらしたのかについて描き出している。

日本に暮らす私たちとの関連も決して小さくない小型武器の問題について考えるとともに、私たちが暮らす町やコミュニティとの関連で国際協力を今一度捉え直し、今日の国際協力における私たち一人ひとりの関わりの大切さを提起した一冊である。

『反市民の政治学 — フィリピンの民主主義と道徳』

法政大学出版局(2013年4月刊行) 日下 渉(著)



「途上国で民主主義を機能させ、良い統治のもとで経済発展を達成するためには、貧困層を教育して、道徳的市民に育成しなくてはならない」。皆様はこのような見解に同意されるでしょうか。本書では、こうした議論に対して、フィリピンの貧困層の視座から反論を突き付けました。彼らは、正しき市民を語る言説や実践によって、国の発展を損なう悪しき存在として決めつけられ、声を奪われ、排除されてきたからです。近年の日本でも、政治改革のためには、悪しき人々を善き市民へと変えねばならない、それが無理ならば政治や社会から排除することも必要だと訴える声飛び交っています。しかし、こうし

た道徳的言説は、人々を善悪に切り裂くことで、多様な人々が討議を通じて諸問題を解決していくという民主主義の複数性そのものを否定してしまいます。その結果、悪しき存在として正統性を奪われた人々の声は民主空間で聞かれず、社会には敵意と怨嗟が累積していきます。異なる道徳を抱えて対立する人々は、いかに互いを排斥し合うことなく、共に不平等や貧困を解決していけるのでしょうか。そのような問題を考える際に本書の議論が参考になれば幸いです。

新スタッフ紹介

国際開発専攻
教授 梅村 哲夫

昨年10月1日に琉球大学から国際開発専攻に赴任してきた梅村哲夫です。GSIDの二期生で長田先生が指導教官です。新任紹介ということですが、このニューズレターには、学生のときに1回、実地研修助手の時に1回原稿を載せてもらい、今回で3回目となります。

前職では国立大学初の観光系学部及び研究科を、かつてGSID教授であった嘉数先生の下でゼロから立ち上げ軌道に乗せ、研究科長の任期の途中で異動してきました。専門は国際経済学ですが、観光と開発、島嶼国の経済開発及び特殊事情を抱える沖縄経済について関心を持っています。

縁あって再びGSIDに所属することになりましたが、GSIDの黎明期にご尽力頂いた先生方の理念を大切に、時代の変化を取り入れた教育研究活動を展開していく所存です。

国際協力専攻
准教授 日下 渉

大学生の時に途上国の貧困に強い関心を持っていたため、開発学を勉強しようとしたことがあります。しかし、現地の生活を知らぬまま開発を考えることに限界を感じたため、まずはフィリピンのスラムに住み込んで、そこで暮らす人々を内面的に理解しようと思いました。スラムで彼らの視座から物事を考えてみると、既存の政治理論の綻びが次々に見えてきました。フィールドで出会った人々のマイクロなリアリティから現代民主主義の課題を照らし出したい、そのような想いを抱えて研究してきました。GSIDでは、フィールドの友人から教えてもらったことを礎に皆様と一緒に改めて開発を考える機会に恵まれたと喜んでます。どうぞよろしくお願いたします。

国際コミュニケーション専攻
准教授 坂部 晶子

2013年4月から国際コミュニケーション専攻に着任しました。専門は社会学で、おもに中国と日本でのフィールドワークにもとづいた調査研究をしています。

大学院のときは劣等生で、研究テーマが決められず、修士課程は4年間かかりました。自分自身がいる中途半端な位置から始めようと思い、逆に過酷な体験をしたと思われる植民地社会を対象を選び、かつての「満洲国」にいった日本の方々、留学してからは中国の方々に当時の体験談をうかがうようになりました。結果が出るまでには時間がかかりますが、フィールドでお話をうかがったことをかたちにしようという思いが、わたしの動機づけになっています。こうしたフィールドへの向きあい方を研究、教育のなかで活かしていければと思っています。

Campus ASEANプログラム担当 特任教授 西村 眞

2013年1月1日より大学の世界展開力強化事業、Campus ASEANの特任教授として赴任しました。三井物産に34年勤務し、6年前に本学経済学研究科に転職した「変わり種」です。このキャリアを生かして、トヨタ自動車はじめ14企業の協力を得てグローバル人材育成プログラムを経済学研究科時代に立ち上げました。



趣味は特にありません。強いていえば旅行に行き好きなものを食べて、適当に写真を撮るくらいです。これまで52か国、主要都市130箇所訪問しました。英語のリテラシーと国際免許さえあれば世界中どこでも行ける世の中です。学生の皆さんに海外に行ってエンジョイする方法を伝授したいです。

Campus ASEANプログラム担当 特任助教 劉 靖 (LIU Jing)

2013年2月にCampus ASEANプログラム担当特任助教として着任しました。Campus ASEANプログラムの実施運営管理の補助業務を担当させて頂きます。私は2007年に南山大学総合政策学部で卒業後、名古屋大学大学院国際開発研究科・国際開発専攻博士課程前期課程に入学しました。2009年3月に同前期課程を修了した後同課程の後期課程に入学し、2013年3月に博士号を取得させて頂きました。専門は「国際開発」「教育開発」「教育社会学」「中国研究」。途上国(特に中国)における教育政策の形成、実施及び変動にかかわる諸課題を研究しております。Campus ASEANプログラムの人材育成の目標を達成するように一所懸命頑張りたいと思います。



公開講座

名古屋大学ホームカミングデイ公開シンポジウム

世界の構造変動と大学の国際展開・連携・協力

准教授 米澤 彰純

本公開講座は、2012年10月20日、同窓生が集うホームカミングデイ公開シンポジウムと兼ねて行った。現在の大学は、グローバル化・知識基盤社会・新興国の台頭などの世界的な構造変動に直面し、その教育や研究のあり方が大きく変化している。本講座では、新興国を含めた世界と日本の大学の最新の動向を紹介し、今後、日本の大学の国際展開や、海外の大学や産業との連携・協力でどのような展望が開かれているのかを考えた。

まず、本研究科の米澤彰純が趣旨説明を行った後、Allan Lauder氏(インドネシア大学)より、同大学発の大学環境ランキング「UI Green Metric」の取組について講演をいただいた。次いで、梅宮直樹氏(国際協力機構・JICA)より、同機構が手がける高等教育の国際協

力の最新動向をお話いただいた。そのあと、名古屋大学による国際連携・協力の事例を、本研究科同窓生である金村久美氏(名古屋大学日本法教育研究センター)、井戸綾子氏(名古屋大学AC21プロジェクト)から紹介いただいた。同シンポには、学部生、社会人から大学の管理職まで37名の多様な参加者を得た。また、日本のエコ大学ランキングを作成する学生の方にも発言いただくなど、刺激に満ちた会となった。



英語の書記体系 —文字と綴りについて—

教授 大名 力

2012年8月16日(木)~18日(土)、全18時間の集中講義形式で、「英語の書記体系—文字と綴りについて—」という題目で公開講座を行った。内容は講師の大名が国際開発研究科で教えている講義の一部で、演習も取り入れながら、以下のことについて3日にわたり講義した。

- I. 英語の発音と綴り字(フォニックス): 英語の文字、各文字の読み方、接辞の付け方
- II. 分綴法: 分綴の規則、規則間の優先順位、分綴と発音
- III. 文字の種類と発達: 文字の種類・系統・分布について、文字の構成・用法
- IV. ローマ字の起源と発達: アルファベットの基本的特徴、アルファベットの発達、手書き書体の発達、印刷術の発明・発達、英語におけるローマ字と綴り

V. カリグラフィー(講義と実習)

VI. 英語の歴史的な音変化と正書法: 英語史の区分、各時代の文字と綴り、歴史的な音変化

毎日90分の講義が4回とハードなスケジュールで、正直なところ、飽きてしまったり、講義中寝てしまったりする人が出はしないかと心配していたが、嬉しいことに予想は裏切られ、受講生は皆熱心に講義に耳を傾けられ、また、興味を同じくする人同士、休憩時間などに情報交換、ディスカッションを行う光景もよく見られた。受講者は中高大の英語教員が中心だったが、英語に関心がある大学生、会社勤めの方も参加され、アンケートの結果も大変好評であった。



客員研究員の紹介

国内客員研究員

[H24] 渋谷 努(中京大学国際教養学部・教授)

研究課題: ヨーロッパにおける移民の文化人類学的研究
期 間: 平成24年11月~平成25年1月

大竹 雅洋((有)アールディアイ開発部・主任研究員)

研究課題: タイ、ベトナム、カンボジアにおける米政策の比較研究
期 間: 平成24年8月~平成25年1月

牟田 博光(国際開発センター・主席研究員)

研究課題: 教育分野の国際開発の今後の展開について
期 間: 平成24年10月~平成25年3月

結城 貴子(JICA研究所・研究員)

研究課題: 高等教育分野の国際的質保証と学生移動について
期 間: 平成24年12月~平成25年3月

- [H24] 中村 智彦** (神戸国際大学経済学部・教授)
研究課題: 中小企業の発展と日本社会
期 間: 平成24年10月～平成24年12月
- 桑原 尚子** (高知短期大学・教授)
研究課題: 旧ソ連国における法整備支援の実践と課題
期 間: 平成25年1月～平成25年3月

- [H25] 高橋 公明** (名古屋大学名誉教授)
研究課題: グローバリゼーションの中の文化交流
期 間: 平成25年4月～平成25年6月
- 西川 芳昭** (龍谷大学経済学部・教授)
研究課題: 農村開発における地域資源の把握
期 間: 平成25年10月～平成26年3月
- 小林 知** (京都大学東南アジア研究所・准教授)
研究課題: 現代カンボジアにおける社会的流動性に関する研究
期 間: 平成25年5月～平成25年7月
- Christopher DAVIS** (琉球大学法文学部・講師)
研究課題: 琉球語および日本語における談話助詞の
文法論・意味論・語用論的研究
期 間: 平成25年4月～平成25年6月
- 米川 正子** (立教大学21世紀社会デザイン研究科・特任准教授)
研究課題: ルワンダ「虐殺」後の開発に関する批判的分析
一人権と不処罰の視点から
期 間: 平成25年10月～平成25年12月
- 清末 愛紗** (室蘭工業大学大学院工学研究科・准教授)
研究課題: シンガポールの女性憲章の
『女性と女兒に対する罪』に関する考察
期 間: 平成25年10月～平成25年12月

- 千葉 芳弘** (北海道医療大学大学教育開発センター・専任講師)
研究課題: 19世紀後半～20世紀前半のマニラにおけるコレラと水
期 間: 平成25年10月～平成25年12月
- 江藤 彰彦** (久留米大学経済学部・教授)
研究課題: 江戸時代の資源利用と資源配分システムの変遷
期 間: 平成25年12月～平成26年2月

外国人客員研究員

- [H24] Zainal Arifin Mochtar** (ガジャマダ大学法学部・講師)
研究課題: インドネシア憲法政治における独立国家委員会の役割
期 間: 平成25年1月8日～平成25年3月29日
- [H25] MEN Prachvuthy** (王立ブノンペン大学・講師)
研究課題: 地域貯蓄及びその経済的エンパワーメント
期 間: 平成25年5月1日～平成25年8月30日
- DEVINE Joe** (バース大学社会・政策科学部、講師)
研究課題: 人間の福祉・不平等・貧困
期 間: 平成25年7月1日～平成25年8月30日
- NANDANG Rahmat**
(パジャジャラン大学文化学部大学院文学研究科長、日本語研究センター所長)
研究課題: 日本語複合動詞のアスペクトの特徴のイメージ・スキーマ
期 間: 平成25年4月1日～平成25年6月30日
- JAVIER Aser** (フィリピン大学ロスバニョス校公共政策学部・准教授)
研究課題: フィリピンのローカルガバナンスと地域経済開発
期 間: 平成25年10月2日～平成25年12月26日
- 大島 弘子** (パリ・デイドロ大学東アジア言語文化学部・准教授)
研究課題: 日本語の位相の意味語用分析
期 間: 平成25年7月1日～平成25年9月30日

スタッフの人事異動

教員

- 平成24年10月1日 着任
国際開発専攻 教授 **梅村 哲夫** (琉球大学観光産業科学部・教授から)
- 平成25年1月1日 着任
特任教授 **西村 眞**
- 平成25年2月1日 着任
特任助教 **LIU Jing**
- 平成25年3月31日 退職
国際開発専攻 教授 **西川 芳昭** (龍谷大学経済学部・教授へ)
国際協力専攻 教授 **高橋 公明**
国際コミュニケーション専攻 教授 **滝沢 直宏** (立命館大学言語教育情報研究科・教授へ)
国際協力専攻 助教 **マーク・リバック** (名城大学薬学部・准教授へ)
- 平成25年4月1日 着任
国際協力専攻 准教授 **日下 渉** (京都大学人文科学研究所から)
国際コミュニケーション専攻 准教授 **坂部 晶子** (島根県立大学総合政策学部から)

協力教員の交代

- 開発政策講座
旧: **杉田 伸樹** (大学院経済学研究科)
新: **佐藤 宣之** (同上)
- 経営開発講座
旧: **平川 均** (大学院経済学研究科)
新: **萬行 英二** (同上) (H25.7.1から)
- 教育発展講座
旧: **高井 次郎** (大学院教育発達科学研究科)
新: **五十嵐 祐** (同上)
- 比較国際法政システム講座
旧: **森際 康友** (大学院法学研究科)
新: **林 秀弥** (同上)
- 国際文化協力講座
旧: **宮地 朝子** (大学院文学研究科)
新: **大室 剛志** (同上)

事務

- 平成24年10月1日 転出
教務G **箕浦裕満子** (国際部国際学生交流課へ)
経理G **加島 恵太** (財務部経理・資産管理課へ)
- 平成25年4月1日 転出
総務G **近藤 文子** (文系総務課(法学担当)へ)
- 平成24年10月1日 転入
教務G **徳田 香織** (総務部総務課から)
経理G **石原 英紀**
(豊田工業高等専門学校学生課から)

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

オープンキャンパス 2013 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2013」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

- 日時** 平成25年7月13日(土) **会場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)
(事前予約不要) 地図はホームページを参照ください。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内容 プログラム

- (1) 留学生相談 11:00～14:00
- (2) 施設見学
●図書室 11:00-13:00・14:00-16:00
●言語情報処理室(コンピュータールーム) 11:00～12:30
- (3) 公開講演会「コーパス研究入門」 10:30～12:00
- (4) 導入部 スライド上映 13:00～13:05
海外実地研修・国内実地研修画像放映
- (5) 院生によるGSID紹介 13:05～13:45
院生による特色ある社会貢献活動、インターシップ体験談を含む
- (6) 全体説明会 14:00～14:50
●専攻及び教育プログラムの特徴
●GSIDの入学生の構成・就職先
●入学試験の説明 ●公開講座の案内 など
- (7) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00
●各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)
●個別相談(教員と院生が対応)
- (8) 展示 10:00～16:00
海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など

お問い合わせ先/opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp